

2021年度 エコ・カレッジ（職域コース）報告

| | 開講日 | テーマ |
|------------|--------|-----------------------------|
| 開講式 第1回 | 7月28日 | 地球温暖化・気候変動への備えと 環境CSRの取組 |
| 第2回 | 12月8日 | 廃棄物処理と 地域循環共生圏ローカルSDGs |
| 第3回 | 10月6日 | 脱炭素社会に向かう新たな取り組み |
| 第4回 | 10月27日 | 現地視察 |
| 第5回 | 11月25日 | 大気・廃棄物・水質の最新法令と 我が国の動向 |
| 第6回 閉講式 | 1月28日 | 地球温暖化防止活動推進員の事例報告 |

※新型コロナウイルス感染症対策のため、第2回は8月27日、
第3回は9月30日から延期となりました。



一般社団法人 茨城県環境管理協会

エコ・カレッジ（職域コース）を開講しました

～アドバンスコースを含め 74 名の受講生～

7月28日にホテルレイクビュー水戸で、当協会主催のエコ・カレッジ（職域コース）の開講式を行いました。

今年度もお申込みは大変好評で、職域コースと職域アドバンスコース合わせて、74名の方に参加いただきました。

新型コロナウイルス感染症対策のため、机にアクリルボードを設置して3密を避ける対策をとるとともに、開講式はエコ・カレッジの進め方を説明するだけの短時間としました。



地球温暖化・気候変動への備えと 環境CSRの取組について学びました

～第1回エコ・カレッジ～

開講式に引き続き、第1回エコ・カレッジを開催しました。「地球温暖化・気候変動への備えと環境CSRの取組」をメインテーマとして、午前は、「気候変動への備え」をサブテーマに、気候変動適応センターの増富祐司室長、株式会社リーテム取締役でエシカル推進室長の中島佐智世氏の講演、そして午後には、「環境CSRとSDGs」をサブテーマに、開智国際大学の富田俊幸准教授、エコアナウンサーの櫻田彩子氏の講演がありました。

第1部 気候変動への備え

「地球温暖化が農業に与える影響と適応策」

国立研究開発法人 国立環境研究所 気候変動適応センター 室長 増富祐司氏

増富室長はコンピューターによる予測モデルを使って、農作物の気候変動による影響評価や適応策に取り組んでいます。私たちの主食であるコメの話題も多く、適応策の重要性を一層身近に感じることができました。

当日は、①温暖化の現状、②「適応」について、③農作物への影響と対策について、順を追ってお話いただきました。

温暖化の現状については、温暖化に対する対策を取った場合と取らなかった場合の動画をもとに、現在、温暖化対策の有無によって起こる結果を選択できる岐路であること、2度気温が上がると我々の季節感が変わってしまうことなどをお話されました。



気候変動の適応策については、すでに気温が上がってきており、影響が顕われていることを「地球は風邪をひき始めている！」とし、我々が風邪をひいたら治療するように、対処的に影響を軽減するための対策が必要なことや、気候変動適応の情報を得るためのA-PLAT（気候変動適応情報プラットフォーム）についてご紹介いただきました。

温暖化の現状や適応策について理解を深めた後は、本題である「農作物への影響と対策」についてお話いただきました。増富室長が温暖化による農作物の影響モデルの研究に力を入れ始めたのは埼玉県環境科学国際センターに勤務されていた2010年に、埼玉県でコメの白未熟粒が大発生したことがきっかけです。適応策に取り組むためには将来の影響の大きさや場所・時期などを特定する必要があります。いわば影響評価とは敵である温暖化を知る事だそうです。影響評価を行うことによってはじめて適応戦略を立てることができます。

これからも高温でも美味しいお米を作るにはどうしたらよいか？という問いに答えるべく研究を進めていきますと力強いお言葉で締めくくられました。

「地球環境と社会の共生を見据えたエシカルのすすめ」

株式会社リーテム 取締役 エシカル推進室長 中島佐智世氏

株式会社リーテム エシカル推進室長の中島氏は、一般社団法人日本エシカル推進協議会（J E I）でもご活躍されています。当日は株式会社リーテムの沿革・業務内容から太陽光発電設備の現状と課題について、さらに日本エシカル推進協議会の活動についてご講演いただきました。

株式会社リーテムは1909年水戸にて創業、以来、リサイクルを軸に、時代の要請にあわせて、環境課題に取り組んで現在に至っています。最近の話題としては、現在までに設置された太陽光パネルが2030年～2040年に処分のピークを迎えるそうです。太陽光パネルの処理にあたっては、有害物質の含有とリサイクル率が低いことが課題にな

っています。リーテムではその課題を解決すべく、ワンストップサービス、適正処理、高効率処理プロセスを軸に全国対応で取組んでいるそうです。

後半は、エシカル消費についてのお話でした。「エシカル」という言葉は何となく耳にしている、意味を正確に知らなかったのですが、エシカルを直訳すると、倫理的・道徳的という意味で、エシカル消費とは環境に優しく、さらに

人にも社会にも優しいモノを選んで購入する消費スタイルをいいます。「エコ+倫理的・道徳的」と考えるとわかりやすいでしょうか。たとえ環境に配慮されている商品でも、労働搾取や児童労働によって作られたものは、人や社会には優しい商品ではありません。我々消費者は、環境にも人にも社会にも優しい商品を選ぶ眼を養うことが必要であることを学びました。SDGsの達成には誰もが取組まねばならない、エシカル消費。これからは常にエシカルを考えた消費を心掛けていこうと思いました。



第2部 環境CSRとSDGs

「SDGs／ESDを踏まえた環境教育」

開智国際大学 教育学部 准教授 富田俊幸氏

富田先生は、茨城県立高校や茨城県霞ヶ浦環境科学センターに勤務後、現在は、開智国際大学で「環境学」の授業を担当しています。講演では、「環境教育」の変遷について、1972年の国連人間環境会議（ストックホルム会議）で「環境教育」という言葉が国際的に使われ、その後1992年の地球サミットで「持続可能性のための教育」、2002年のヨハネスブルク・サミットで「持続可能な開発のための教育」、そして、2012年持続可能な開発会議（リオ+20）に繋がってきたと説明がありました。



次に、ESDの日本での取組について、岡山モデルや北九州モデルの紹介がありました。そして、ESDとSDGsの関係に及び、企業におけるESDの説明や霞ヶ浦北小学校の「ワカサギの人工ふ化体験」及び茨城県霞ヶ浦環境科学センターの「河川環境学習」について具体的に説明していただきました。また、地球温暖化問題の「緩和策」と「適応策」にまで広範囲に説明していただきました。

「エコアナウンサーとしてSDGs for schoolエデュケーター」

エコアナウンサー 櫻田彩子氏

櫻田氏はエコロジーとエコノミーを応援するエコアナウンサーとして活躍されています。1998年から2004年まで宮城県域テレビ局の朝と夕方の情報ニュース番組で毎日外から「お天気中継」を担当し、気候変動を実感したそうです。

そして、2007年からエコアナウンサーとして、一村一品大作戦、低炭素杯、脱炭素チャレンジカップの司会を務められた経験から、これまでの茨城県勢の活躍を紹介していただきました。

次に、SDGs for school認定エデュケーターとしての活動の説明がありました。学校の先生が集まったのが始まりで、子どもと大人と一緒に活動しているとのことでした。その年の地球の資源を使い果たす日（アース・オーバーシュート・デー）の問題等を出していただきました。

また、変革にチャレンジする人として、6月にゴールドマン環境賞を受賞した平田仁子氏の活躍を紹介し、声を上げることがコミュニケーションであると話されていました。また、気候変動と金融について、SDGsジブンゴト！について具体的に説明していただきました。



8月27日にホテルレイクビュー水戸で開催予定だった第2回エコ・カレッジについては、茨城県独自の非常事態宣言が発令されたことに伴い、会場が使用できなくなったため、12月8日に延期しました。

また、9月30日開催予定だった第3回エコ・カレッジは、国の緊急事態宣言が同日まで延長されたため、10月6日に延期しました。

廃棄物処理の基礎とSDGs先駆者からの講演

～第2回エコ・カレッジ～

12月8日にホテルレイクビュー水戸で、「廃棄物処理と地域循環共生圏ローカルSDGs」と題して、第2回エコ・カレッジ（職域コース）を開催しました。午前の部では「廃棄物処理法概論」の講義、午後の部では「地域循環共生圏ローカルSDGs達成を目指した取組」をメインテーマとして、3名の講師から取り組み事例を紹介していただきました。

1 廃棄物処理法概論

○株式会社 日立製作所 電力環境管理センタ 主任技師 鈴木良治 氏

「廃棄物処理法概論」と題し、最初に不法投棄の実状、廃棄物の分類及び処理方法等、廃棄物全般に関わる説明がありました。続いて、許可証・委託契約書・マニフェストについて具体例を示して解説していただきました。廃棄物に関する細かな法律や手順についてある程度学んだところで、最後に演習という形で実際にマニフェストをみんなで作成しました。感染対策のため、講師が巡回しつつアドバイスをを行うといったこれまでのスタイルは取れませんでした。その代わりにスクリーンを活用して全員と歩幅を合わせつつ丁寧にマニフェスト作成をサポートしていただきました。



2 地域循環共生圏ローカルSDGs達成を目指した取組

○とんがりチーム®研究所 主宰 野口正明 氏

「地域の気候変動アクション」「気候変動の藤野学」を起点に と題して、企業ビジネス向け組織開発コンサルタント並びに市民共同の活動を行っているとんがりチーム®研究所についての紹介と“気候変動の藤野学”について紹介していただきました。気候変動アクション環境大臣賞を受賞するに至った経緯として、市民や活動団体を繋げ、協力し合って課題を解決するための考え方について、教えていただきました。



○エコドライブ研究所 代表 福田慎太郎 氏

「エコドライブで利益向上」というテーマのもと、エコドライブを始めた人々や、すでにエコドライブに取り組んでいる人のみならず、エコドライブについて知らない人にとっても有益な講義をしていただきました。まず初めに、講師の自己紹介を踏まえつつエコドライブを取り入れた受講者たちのアンケート内容について触れながら、エコドライブが如何にいいものか説明がありました。エコドライブは、その名のとおり、環境にやさしくエコであるというだけでなく、燃費の向上によって経済的にも優しく、事故を減らすことにもつながり、精神的ストレスの緩和すらできるという多くのメリットを知ることができました。講義の中では、ドライバーだけでなく普段運転しない人でもできるエコドライブについての解説があり、明日からでも実践できると思います。



○劇団シンデレラ 演出家 ファンキー健一（伊藤健一） 氏

「SDGsで日本を元気に」と題して、劇団シンデレラの演出・演技指導・音響・照明等のスタッフとしての目線からSDGsを日本に広めていく活動について話していただきました。劇団シンデレラの成り立ちから、活動の目的、これまでの実績について触れつつ、ミュージカル作りへのこだわりについて熱く解説していただきました。これまでの活動や実績を達成するに至ったミュージカルの力と



は「言葉だけだと難しい話も、老若男女に対してわかりやすく伝えることができる」、「見ていて、楽しく！元気になる！」という二つの利点を挙げてくださいました。多くの人々を動かし、全員で一步を踏み出すためには、まず「楽しい」と思えなきゃいけない。その感覚が長続きの秘訣だと教えていただきました。

※第2回エコ・カレッジは、8月27日開催予定でしたが、国の緊急事態宣言発令に伴って12月8日に延期しました。

「脱炭素社会に向かう新たな取り組み」 をテーマに発表していただきました

～2021年度 茨城県地球温暖化防止活動推進員第2回全体研修会、
第3回エコ・カレッジ、環境事例発表会～

10月6日にホテルレイクビュー水戸で、推進員第2回全体研修会、第3回エコ・カレッジ、環境事例発表会を同時開催しました。当初は9月30日開催予定でしたが、国の緊急事態宣言発令期間中のため延期しました。今回のプログラムは、午前のPART1で、生物多様性とゼロカーボンへの取組と題し講演をいただき、午後のPART2では、カーボンニュートラルな社会を目指してと題し講演とパネルディスカッションを行いました。地球温暖化防止活動推進員やエコ・カレッジ受講者、行政機関などから128名の参加者で、密を避けるために会場を通常の倍の広さにして開催しました。

以下にその概要をお知らせします。

PART1 生物多様性とゼロカーボンへの取組

「ヒヌマイトトンボ発見から50年」

・茨城県環境アドバイザー 茨城生物の会 会長 小菅 次男 氏

広瀬誠先生と一緒に、1971年7月7日七夕の日に新種のトンボ「ヒヌマイトトンボ」を発見した状況と生息地の環境の変遷について紹介していただきました。最初に、写真によりオスとメスは見た目ですべて違っているとの説明があり、発見当時、生息地が埋立等で危険な状況にあることがわかり、テレビや新聞で取り上げてもらったことを臨場感



たっぷりに説明していただきました。また、調査の結果、涸沼では13カ所でヒヌマイトトンボの生息地を確認、各生息地の変遷についての詳しい説明がありました。その後、生態について、アオモンイトトンボが天敵、自宅で累代飼育に成功、塩分濃度によりふ化できる、共食いをしないので大きな群れができるがアオモンイトトンボを放すとあっという間に捕食されてしまう等について写真を使って詳しく説明されました。

そして、埋め立てや東日本大震災による地盤沈下による被害状況の説明があり、ヨシ原が水たまりになってしまい、生息地が消滅。2016年には常陸河川国道事務所の幼虫放流事業に協力。また、2004年からの県の湖岸植生帯再生事業の紹介がありました。最後に、利根川下流の生息地を守る運動の説明がありました。

「廃棄物処理の脱炭素化に向けた廃棄物エネルギーの利活用」

・早稲田大学大学院 環境・エネルギー研究科 教授 小野田 弘士 氏

最初に脱炭素社会と低炭素社会の違いの説明がありました。低炭素社会ではハイブリット車でも良いが、脱炭素社会は話が違うというところから講義が始まりました。

脱炭素社会には、化石由来のエネルギーの直接利用は実質的に不可能な時代の到来か、水素社会が提唱されているが、何から水素を生成するかが課題、CCSに期待はあるがどこに貯留できるかが

大問題、最終需要形態のほとんどが電力に移転するのでは、何から電力を得るのが問題、再生可能エネルギーは最大の本命であることは間違いない、原子力への依存は長期的には無理なのかなどの課題があるそうです。

防災拠点の中心施設としての清掃工場がここ10年で出てきており、また、市民生活の根幹となる社会インフラ「生活根幹施設」、一時たりとも代用のきかない社会インフラ「非代替施設」、地方創生の基盤となる社会インフラ「地域基盤施設」として廃棄物処理施設が重要だとの説明がありました。

平成31年の持続可能な適正処理の確保に向けたごみ処理の広域化及びごみ処理施設の集約化についての説明では、64自治体の調査結果の説明があり、また、食品系バイオマスの官民連携型メタン発酵事業についての埼玉県本庄市での実証試験、ふじみの市での事業化、愛知県豊橋市のバイオマス利活用センターの紹介があり、インフラとの連携が重要とのことでした。



「気候変動対策の現状と環境」

・環境省関東地方環境事務所 地域適応推進専門官 川原 博満 氏

最初に、近年の大雨や台風による激甚な風水害の説明があり、今後、気候変動により大雨や台風のリスク増加の懸念があり激甚化する災害に、今から備える必要があるとの説明がありました。

また、適応策には、潜在的適応策と追加的適応策があることを覚えてくださいとのことでした。

そして、気候変動の現状と将来予測、気候変動に伴う世界の動きと我が国の目標、気候変動に対する緩和策での政府の取組及び民間事業者の取組、気候変動への適応策での政府の取組及び自治体と市民の取組を環境省の立場から詳しく説明していただきました。



PART 2 カーボンニュートラルな社会を目指して

「気候非常事態行動計画ガイドブックについて」

- ・気候非常事態ネットワーク（CEN） 事務局長 竹内 光男 氏

最初に山本良一氏を中心としたCENの設立経緯の紹介がありました。気候非常事態行動計画ガイドブックを作成し気候非常事態を宣言し、気候非常事態行動計画を作成し、この行動計画を確実に実行するため約150名の発起人の出席のもと令和2年11月に設立。設立総会には小泉環境大臣や小池都知事からのビデオメッセージが届き、作成したガイドブック解説動画を会場で紹介した様子の説明がありました。



また、今年6月開催の「気候非常事態とカーボンニュートラル」サミットの様子や全国1,700自治体への気候非常事態宣言を要請し現在99自治体が宣言されていること、CEN会員への毎週水曜日のメルマガ配信、今年10月開催予定の「CEN Youth サミット(仮)」の開催支援などの紹介がありました。

「印刷物で脱炭素社会に貢献」

- ・一般社団法人 日本WPA 事務局 武田 惇 氏

一般社団法人 日本WPAは、「水なし印刷」を通じて、環境に優しく、高品質な印刷物を提供することを目的に、環境保全、情報発信、普及活動に取り組む印刷会社の団体です。WPAは1993年アメリカで結成され、日本WPA（日本水なし印刷協会）が2002年に結成され、2010年に法人化され、現在150社が加盟しているとの紹介がありました。水あり印刷は、VOCが水なし印刷の約10倍発生するのに対し、水なし印刷は廃液が出ず、環境省が推進する「グリーン購入法」に採用されており、また、印刷物のカーボンオフセットにより、排出CO₂を実質ゼロで印刷することにより、地球温暖化防止になりSDGs13番に貢献しているとの説明がありました。カーボンオフセットとは、他の場所で誰かが創ったクレジットを活用して、自分が排出してしまうCO₂等を埋め合わせ（相殺）することで、日本WPAのカーボンオフセットの実績は9月時点で7,349トンになるとの説明がありました。



「日本マクドナルドのSDGsの取り組み」

- ・日本マクドナルド株式会社 コミュニケーション&CR本部 CSR部
マネージャー 岩井 正人 氏

マクドナルドが優先的に取り組んでいるSDGsの6つの項目の説明がありました。15番「陸の豊かさを守ろう」：製品の原料は基本的に陸の物で出来ている、2番「飢餓をゼ

ロに」：リーズナブルに提供、12番「つくる責任つかう責任」：原料の調達とゴミの処理（リサイクル率58%）、8番「働きがいも経済成長も」：従業員の待遇改善、お店の成長、13番「気候変動に具体的な対策を」：新聞と会社の原料を一緒に運ぶ等、そして一番重要視しているのが17番「パートナーシップで目標を達成しよう」：100以上の国・地域で店舗がありいろいろな団体等と一緒に知恵をしばりながら何かをやろうと考えていると話されていました。そして、国際認証マークを印刷したサステナブル・ラベルやお客様とのコミュニケーション、サステナブル購買行動調査、食品ロス削減の取組、おもちゃリサイクルプロジェクトなどの先進的な取組の説明がありました。



「次世代を見据えたエネルギーの循環」

・新和環境株式会社 経営企画部長 川野 秀俊 氏

会社の Mission が「目指すのは環境・経済・人の新たな調和」、Vision は「社会に必要とされる調和を創る会社」、行動指針 (Value) としての「誠実に取り組もう」等5項目の説明がありました。エネルギーへの取組みとして、再エネ 100 宣言をし、2040 年に 100%再生可能なエネルギーに切り替える目標を掲げ取り組んでおり、具体的に、木質バイオマスから「電気」「熱」「水素」を創出し、エネルギーセンターとリサイクルセンターの稼働エネルギーとして還元し、持続可能なエネルギーの循環を目指して建設した吉川再生可能エネルギーセンター（埼玉県）について詳しく説明していただきました。



・パネルディスカッション

コーディネーター：山梨大学 燃料電池ナノ材料研究センター 教授 吉積 潔 氏

パネラー：竹内 光男 氏、武田 惇 氏、岩井 正人 氏、川野 秀俊 氏



講演後、吉積潔氏をコーディネーターに、講演者をパネリストとしてパネルディスカッションを行いました。ここでは、それぞれの分野の視点から参加者の質問を交えて、SDGs と企業の経営戦略について話し合っていました。

各講師の皆様の素晴らしいご講演と先端技術のご紹介、まことにありがとうございました。

最新の環境CSR事業所等を視察

～第4回エコ・カレッジ～

10月27日に第4回エコ・カレッジを開催しました。今回は、キヤノンエコテクノパークとサイエンス・スクエア つくば、地質標本館の3施設を視察しました。職域コース及び職域アドバンスコースの受講生、事務局員58名の参加で大型バス2台での新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じた視察となりました。

【キヤノンエコテクノパーク】

キヤノングループの資源循環の取り組みを発信する施設として、2018年12月、坂東市に誕生したのがキヤノンエコテクノパークです。最新鋭のリサイクル工場見学コースのほか、キヤノンのリユース・リサイクルへの取り組みをパネルや展示で紹介するショールームが設けてあります。

最初に、運営会社のキヤノン エコロジー インダストリー株式会社代表取締役社長の荒井様等からキヤノンのリサイクル・リユースの活動について説明をしていただいた後、3つのグループに分かれてショールームとリサイクル工場を見学しました。



【サイエンス・スクエア つくば、地質標本館】(つくばサイエンスツアー)

午後はつくば市に移動して、つくばサイエンスツアーのコースとなっている「サイエンス・スクエア つくば」と「地質標本館」を視察しました。どちらも、国立研究開発法人 産業技術総合研究所の施設となっています。サイエンス・スクエア つくばは、コロナ対策として20名ずつ3班に分かれての視察となり、産業技術総合研究所の最新の研究成果を視察しました。地質標本館については自由見学としました。なお、つくばサイエンスツアーは、一般財団法人 茨城県科学技術振興財団が運営しています。



サイエンス・スクエア
つくば視察



今回の視察にご協力いただきました、キヤノン エコロジー インダストリー株式会社、産業技術総合研究所、茨城県科学技術振興財団の皆様へ厚く御礼申し上げます。

最新の環境情報をお伝えしました

～第5回エコ・カレッジ～

11月25日にホテルレイクビュー水戸で、「大気・廃棄物・水質の最新法令と我が国の動向」と題して、第5回エコ・カレッジ（職域コース）を開催しました。環境に関する重要テーマとして、午前に大気、午後に廃棄物、水質の順で、最新情報を一度にまとめて学べる密度の濃い講座となりました。

○大気環境の動向 愛媛大学名誉教授 若松伸司 氏

「光化学オキシダントとPM2.5を中心として」と題し、大気環境の動向についての内容でした。初めに、基礎知識として大気汚染物質がどのようにして生成されるのか、それに即した環境基準の制定・改定の経緯についてお話しいただきました。その中で、浮遊粒子状物質と揮発性有機化合物との関係性や、太陽光による化学反応の経緯についての話があり、続けて光化学オキシダントとPM2.5についての詳しい説明がありました。その中で、微小粒子は広域的、長距離にわたり輸送されることからその拡散力を問題に上げた上で、事例を挙げつつ日本や周辺諸国の大気環境変異について解説していただきました。中国の大気汚染グラフも年々低下の一途をたどっているが、オゾンだけ増えていることをグラフから読み解き、今後日本はこの影響を受ける可能性があるかもしれないと教えていただきました。



○廃棄物の動向 株式会社 リーテム 取締役 浦出陽子 氏

最初に、会社の紹介やSDGsへの取り組みについての説明がありました。また、全体を通して不法投棄問題について、近年発生した盛り土の土石流問題を例に挙げつつ、産業廃棄物処理の適切な流れについて解説していただきました。これまで紙で行ってきたマニフェストの交付も、電子化率が進んでいることについてご説明していただきつつ、これからの廃棄物の適正処理とリサイクルのための法制度についてお話しいただきました。来年からプラスチック資源循環法に関する新たな



制度が予定されていることについて話されており、今後循環型経済のためにこれまでの3Rという考え方が、今後より重要になってくることを教えていただきました。

○水環境の動向 茨城県霞ヶ浦環境科学センター長 福島武彦 氏

初めに、新しい水質環境基準についての背景として、海域での水質の改善は達成されたものの、貧酸素水塊の発生や藻場・干潟等の消失、水辺地の親水機能の低下がみられることについてお話しいただきました。そのため、従来の有機汚濁指標、栄養塩だけでなく、水生生物の生息への影響等を直接判断できる指標や国民に直感的に理解しやすい指標の導入として新しい水質環境基準が必要であると説明がありました。底層溶存酸素量(底層DO)、透明度の測定方法や問題点について霞ヶ浦や、現在指定の進んでいる琵琶湖、東京湾を例と



して分かりやすい説明がありました。また、底層DOや透明度についての対策の説明もありました。リモートセンシングを利用した水環境解析について、人工衛星による広範囲エリアの調査解析事例として三方湖におけるヒシ属分布の変遷画像や面積の変化等の解説がありました。そして、地球温暖化・気候変動の水環境への影響、霞ヶ浦・北浦の水質の問題点についての説明がありました。本来冬になると冷たい水が流れ込むことによって水中の酸素がかき回され、底層溶存酸素量が上がるはずのところ、地球温暖化の影響で水温が上がり、循環しなくなっている点について解説していただきました。他にも、下水処理を徹底したことにより、水清ければ魚棲まず状態になっている点について触れ、色落ちした海藻類の写真を添えつつ、これまでの排出規制という考え方を改めるよう話されていました。従来の規制という考え方から、水質の管理という形へ進みつつあること、それに伴い、温室効果ガスの吸収源ともなる藻場の再生・創出を後押しし、海洋プラスチックごみ問題も解決しようという、今地球が抱えている問題に対する幅広いアプローチをお話しいただきました。



熱心に話を聞く受講生の皆さん

2021 年度エコ・カレッジ（職域コース）が閉講

～職域コース 29 名、職域アドバンスコース 44 名が修了～

1 月 28 日に、第 6 回エコ・カレッジ（職域コース）をホテルレイクビュー水戸で開催しました。「茨城県地球温暖化防止活動推進員の取組み紹介と心構え」と題して、2 名の推進員に発表していただきました。その後、閉講式を行い 2021 年度の全日程を終了しました。

【茨城県地球温暖化防止活動推進員の取組み紹介と心構え】

以前から活躍されている推進員が活動事例を紹介しました。エコ・カレッジ（職域コース）の修了生の多くが推進員となり、各地域で温暖化防止活動を行っています。修了生が推進員となった際の参考になる活動事例や多方面において連携・協力してさらなる効果を得るためのノウハウ等を紹介するために開催したものです。

茨城県にもまん延防止等重点措置が適用中で、机の間隔を十分に確保したり、机に間仕切りボードを設置するなど感染防止に万全を期して開催しました。また、リモートでの出席も呼びかけた結果 5 名がリモートでの参加となりました。

・事業所の環境 CSR の事例

フィリップ モリス ジャパン合同会社

つくばユニット主任 鈴木友和 氏

鈴木推進員は、2019 年度エコ・カレッジ（職域コース）を修了し、翌年度から推進員として活動し、フィリップ モリス ジャパン合同会社のつくばユニット主任として日々活躍されています。

初めに、コーポレート・サステナビリティ担当の濱中祥子様から同社のサステナビリティの紹介があった後、鈴木推進員から推進員の取組の発表がありました。

鈴木推進員は、推進員グループの econet つくばに所属しています。同じグループの econet いばらき及び econet みとと連携しながら活動しており、3 グループは、エコ・カレッジ（職域コース）の修了生 78 名で構成されています。2021 年度は、コロナの影響で、様々な制約・制限があるなかで、将来を担う子どもたちと一緒に楽しく活動してきており、昨年 8 月に開催した「子供たちとのエコ工作 in 笠間工芸の丘～親子自然観察会と SDG s バッチ工作～」と「子供たちとのエコ工作 in 水戸ホーリーホック～夏まつりでエコ工作～」の発表がありました。続いて、10 月に開催した「千波湖ビオトープメンテナンスとアメリカナマズフィッシング&茨城セブンの森」、そして、12 月に開催した「カーボンニュートラル econet フォーラム 2021」の 4 つの取組事例を発表していただきました。



そして最後に、推進員としての心構えとして、自分にできる事から始め継続する、参加できるときに参加する、役割分担して楽しく協働、推進員の活動だけでなく地域環境保全活動も一緒にの4つを挙げていただきました。

・市民や学校の取組事例 穂積裕太 氏

穂積推進員は、2018年度エコ・カレッジ（体験コース）を修了し、翌年度から推進員として活動している大学一年生です。

初めに、2017年2月開催の「低炭素杯2017」に水戸英宏中学校の一員として出場し、環境大臣賞金賞とオーディエンス賞のW受賞するまでの経過を発表していただきました。はじめは、「英宏の泉」で泥だらけになりながら環境整備を行い、ホタルの幼虫を放流しホタルが再生するまでの活動内容を、2016年開催の茨城県地球温暖化防止活動推進センター主催の「クールアースいばらき大会」で発表し最優秀



となり、翌年の「低炭素杯」に推薦されました。大会ではアクシデントを克服して奇跡的に制限時間5秒前の3分55秒でプレゼンを終了したことなどを動画とともに臨場感あふれる発表をしていただきました。そして、推進員になった後も地域環境活動に参加していることの発表がありました。

【閉講式】

同日、閉講式を開催しました。来賓の茨城県県民生活環境部環境政策課の佐藤隆史課長から祝辞をいただき、当協会の猿田理事長から職域コース及び職域アドバンスコース（18名がリモートで参加）の受講者一人ひとりに修了証書を授与しました。その後、記念撮影を行い、2021年度のエコ・カレッジ全課程を終了しました。



職域コース修了の皆様

職域コースの修了者は29名、職域アドバンスコースの修了者は44名でした。2022年度も最新の環境ニーズを組み込みながら実施しますので、ぜひ、ご参加ください。



職域アドバンスコース修了の皆様